子どものすきな神さま

新美南吉

子どものすきな小さい神さまがありました。いつもは森の中で、歌をうたったり笛（ふえ）をふいたりして、小鳥やけものと遊んでいましたが、ときどき人のすんでいる村へ出てきて、すきな子どもたちと遊ぶのでした。

けれどこの神さまは、いちどもすがたをみせたことがないので、子どもたちにはちっともわかりませんでした。

雪がどっさりふったつぎの朝、子どもたちはまっしろな野っぱらで遊んでいました。するとひとりの子どもが、

「雪の上に顔をうつそうよ。」

といいました。

そこで十三人の子どもたちは、腰（こし）をかがめてまるい顔をまっしろな雪におしあてました。そうすると、子どもたちのまるい顔は、一列（れつ）にならんで雪の上にうつったのでした。

「一、二、三、四、……」

とひとりの子どもが顔のあとをかぞえてみました。

どうしたことでしょう。十四ありました。子どもは十三人しかいないのに、顔のあとが十四あるわけがありません。

きっと、いつものみえない神さまが、子どもたちの

そばにきているのです。そして神さまも、子どもたちといっしょに顔を雪の上にうつしたのにちがいありません。

いたずらずきの子どもたちは、顔をみあわせながら、目と目で、神さまをつかまえようよ、とそうだんしました。

「兵隊ごっこしよう。」

「しようよ、しようよ。」

そうして、いちばんつよい子が大将になり、あとの十二人が兵隊になって、一列にならびました。

「きをつけッ。ばんごうッ。」

と大将(たいしょう)がごうれいをかけました。

「一ツ。」

「二ツ。」

「三ツ。」

「四ツ。」

「五ツ。」

「六ツ。」

「七ツ。」

「八ツ。」

「九ツ。」

「十ツ。」

「十一ッ。」

「十二ッ。」

と十二人の兵隊がばんごうをいってしまいました。そのとき、だれのすがたもみえないのに、十二番目の子どものつぎで、

「十三ッ。」

といったものがありました。玉をころがすようなよい声でした。

その声をきくと子どもたちは、

「それ、そこだッ。神さまをつかまえろッ。」

といって、十二番目の子どものよこをとりまきました。

神さまはめんくらいました。いたずらな子どものことだから、つかまったらどんなめにあうかしれません。ひとりのせいたかのっぽの子どものまたの下をくぐって、神さまは森へにげかえりました。けれど、あまりあわてたので靴（くつ）をかたほう落としてきてしまいました。

子どもたちは雪の上から、まだあたたかい小さな赤い靴（くつ）をひろいました。

「神さまはこんな小さな靴（くつ）をはいてたんだね。」

といってみんなで笑（わら）いました。

そのことがあってから、神さまはもうめったに森か

ら出てこなくなりました。それでもやはり子どもがすきなものだから、子どもたちが森へ遊びにゆくと、森のおくから、

「おオい、おオい。」

とよびかけたりします。

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：めいこ
校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。